

ンによる化学療法を施行し、その治療成績について検討した。CPT-11; 150 mg/m²を Day 1, 15に5FU; 600 mg/m²を Day 3~7に点滴静注し、これを1コースとして、5例に対し平均40.4日周期で、1~4(平均2.8)コース施行した。副作用では、WBC減少 Grade (G) 4; 2例, G 3; 3例, Plt減少 G 4; 1例, 下痢 G 2; 5例に認められた。評価可能病変を有するものは4例で、子宮頸部腺癌では PR 1/2, NC 1/2, 子宮体癌では PR 2/2例であり、全体として奏効率は75%であった。全例担癌生存中であり、平均生存期間は41.8カ月であった。以上より、本レジメンの有用性が期待された。

11) 難治性胚細胞腫瘍に対する3回連続の末梢血幹細胞移植併用高用量化学療法の試み

西山 勉・照沼 正博(厚生連長岡中央総合病院泌尿器科)

通常の化学療法や、単回の末梢血幹細胞移植併用高用量化学療法(HDCT+PBSCT)では完治できなかった難治性胚細胞腫瘍2例(左精巣腫瘍多臓器転移(複合組織型, 病期ⅢC)症例と縦隔腫瘍(絨毛癌)多発肺転移症例)に対して導入化学療法(CDDP, VP16, BLM., 3コース)後に3回連続のHDCT+PBSCT(CBDCA, +VP16, +IFM, ±TESPA, ±MXT, +PBSCT)を試みた。HDCT+PBSCTは1コースを6週間で行った。2例ともPBSCT後の骨髄機能の回復は良好であった。1例は早期に癌死したが、1例は癌なし生存中である。この様な Germ Cell Consensus Classificationで POOR PROGNOSISに分類される難治性症例に対しては、今回試みたような複数回のHDCT+PBSCTを考慮する必要があると思われる。

12) 腹腔内大量出血により発見された膀胱後部平滑筋肉腫の一例

有本 直樹・小松原秀一(県立がんセンター)
渡辺 学・北村 康男(新潟病院泌尿器科)
田中 乙雄・佐藤 友威(同 外科)

症例は72歳男性。平成10年4月17日、腹痛にて来院。腹部は緊満しており、CTにて14×12cmの膀胱後部腫瘍、多量の腹水を認めた。検血にて著明な貧血があり、腫瘍からの腹腔内大量出血によるショックと診断、当院外科緊急入院となった。輸血、および血管造影下に左内

腸骨動脈からの腫瘍栄養血管の塞栓術を施行しショック状態は改善した。4月20日当科紹介、転科となった。経直腸エコーで腫瘍は膀胱や前立腺とは境界されていた。腹水細胞診はclass II。5月7日手術施行、開腹所見にて広範な腹膜播種が存在、術中迅速病理で悪性所見(+)であった。しかし腫瘍組織はもろく出血がコントロールできないため、根治性はないものの両側内腸骨動脈を結紮後腫瘍摘出した。病理診断は平滑筋肉腫であった。術後経過は良好で5月28日退院した。平滑筋肉腫に対する化学療法にはあまり有効なものがなく、広範な腹膜播種の存在も考え、このまま経過観察の予定である。

13) 乳癌微小転移のマーカーとしてのKeratin-19 mRNAの検出

佐藤 豊二(新潟県立がんセンター 生化学検査室)
本間 慶一(同 病理部)
牧野 春彦・佐野 宗明(同 外科)

乳癌患者の微小転移を検出する目的で、腋窩リンパ節よりkeratin-19 mRNA(K-19)の検出を試みた。対象は1996年4月-1997年11月までに腋窩郭清(Level II)を施行した乳癌100例の連続症例である。郭清リンパ節は2分割し、病理検索と本検出に使用した。検索方法はReverse Transcriptase Polymerase Chain Reaction(RT-PCR)である。結果は、sensitivityが64.9%と本検索のqualityを問われる問題に直面した。この問題を解決するために、1) Southern法によるPCR産物の確認、2) primerを変えて低分子のK-19を標的とする、3) thermal cyclerの機種を変更する、などの施行錯誤を試みた。最終的にはsensitivityが94.6%に改善された。この経緯も含めてK-19検出の試みを報告する。

14) Chronotherapyを応用したFLMP療法—第5報、乳癌に対する効果について—

横森 忠紘・家里 裕
小林 功・綿貫 啓(小千谷総合病院)
徳峰 雅彦・村岡 正人(外科)

【目的】当施設ではBiochemical modulationを考慮した多剤併用化学療法に、生体の日周リズムに基いた時間治療学(Chronotherapy)の理論を導入したFLMP療法を施行している。今回は進行再発乳癌に対